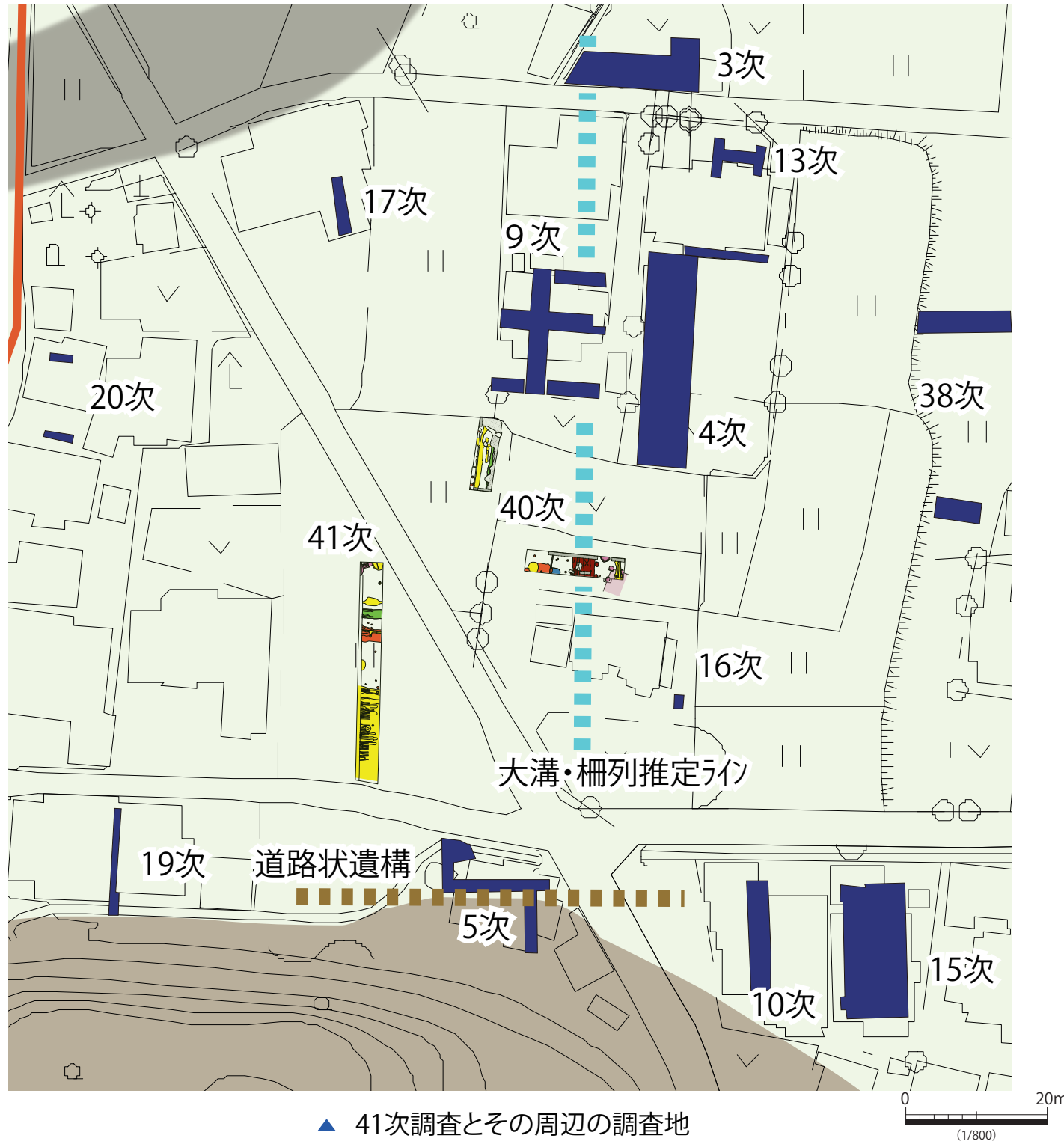


令和5年12月23日
香川県埋蔵文化財センター

次いで、江戸時代には調査区の南部の広い範囲が削られ（段落ち）、カラスキ（ウシंगा）による牛馬耕が行われたことが、小溝群から分かります。これまでの周辺での発掘成果と合わせると、地形に応じて小さな単位で田畑が拓かれていったようです。江戸時代の地域の中心村落＝本村ができあがった頃の農村としてのあり方を、遺構は示しています。やがて田畑は、より大きくまとめられ、現在に至ります。

国府という都市域から、現在につながる農村へ、という景観の変化の一端をうかがうことのできる成果と言えます。



▲ 41次調査とその周辺の調査地

『令和5年度 讃岐国府跡41次調査 現地説明会資料』

令和5年12月23日

編集・発行 香川県埋蔵文化財センター
〒762-0024 香川県坂出市府中町南谷字5001-4
TEL:0877-48-2191 FAX:0877-48-3249
Email: maibun@pref.kagawa.lg.jp <https://www.pref.kagawa.lg.jp/maibun/>

1. 讃岐国府とは

国府は、古代に置かれた66ヶ国2島を統治した役所です。国府には、儀式や政治を行う中心施設である政庁（国庁）や、実務のための施設（国衙）、国府の長である国司の館等の施設によって構成されます。讃岐国府は、坂出市府中町に所在していました。

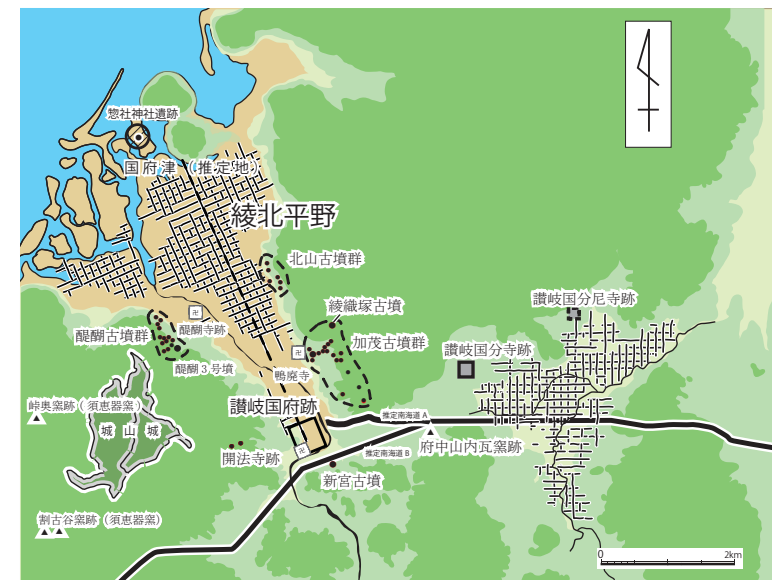
讃岐国府は、9世紀には実務型国司（良吏）が多く赴任し、地方政治の改革を進めました。菅原道真はその代表的な人物です。また、中央の政治動向とも密接にかかわり、崇徳上皇（1164没）が晩年を過ごしたゆかりの地として知られています。国府が鎌倉時代いっぱいまで続くことは、発掘成果からも確認されています。

讃岐国府のそばには南海道の河内駅家（うまや）もあったとされ、また国府の横を流れる綾川は、河口部の国府津にもつながっています。このように水陸の交通の要衝であったといえます。

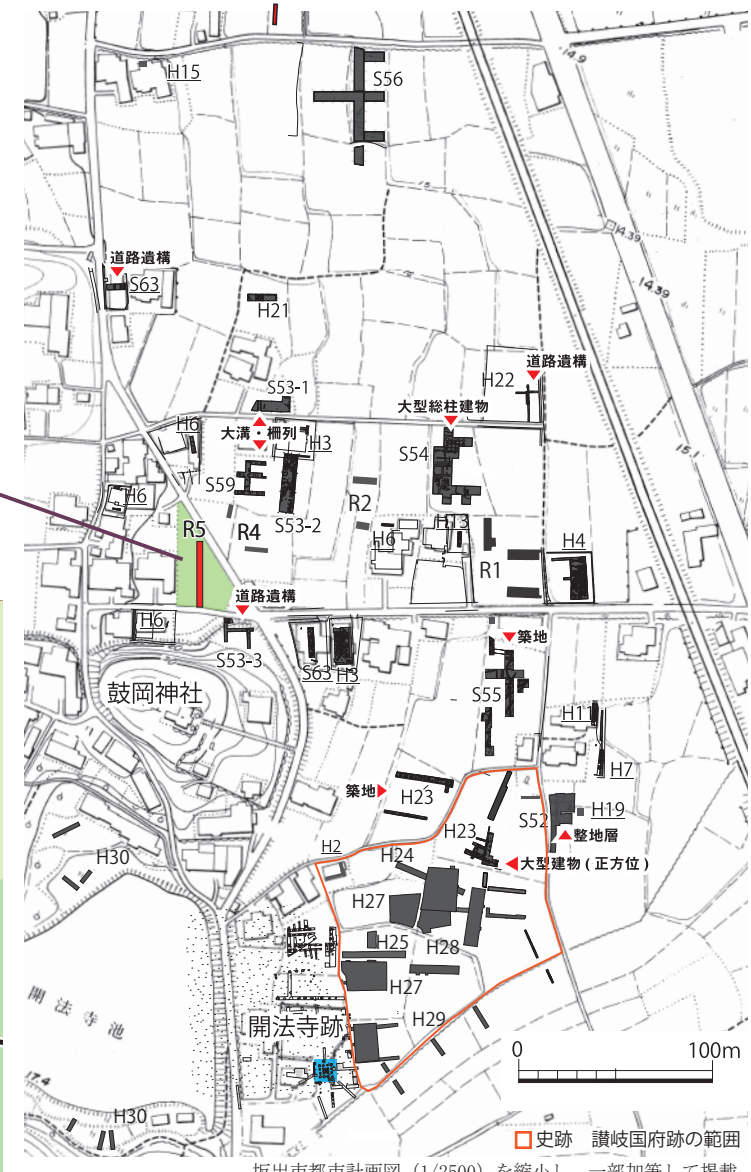
香川県埋蔵文化財センターでは、讃岐国府跡の広がりや確認や、主要施設推定地の実態の解明を目的とする発掘調査を、平成21年度から行っています。

今回の調査地点

今回の調査地点は、昨年度（40次）の調査地に隣接します。昨年度確認した3次及び9次調査地から続く大溝はさらに南へ延び、この溝によって区画されると考えられる国衙関連施設の南限を確認し、その区画施設内の内容を確認することを調査の目的としています。



▲ 讃岐国府周辺の歴史的環境



▲ 讃岐国府跡における発掘調査地点と代表的な検出遺構

2. 讃岐国府跡 41次調査の成果

① 讃岐国府出現前夜（飛鳥時代）

溝状遺構 SD04 と土坑 SK02 は、埋土の様子から近接した時期の遺構と考えられます。時期の分かる出土遺物が無く、帰属時期は不明ですが、当調査地の南東約 200mにある史跡指定地で確認された、7世紀後葉～8世紀初頭にかけて造営された前身官衙である大型建物群が正方位もしくは正方位を意識した主軸を採ることから、この頃の遺構であると想定できます。40次調査では同時期の掘立柱建物や柱穴が確認でき、そのうちの1基は今回のSD04と近い主軸を採ることから、同時期の遺構であると考えています。



溝状遺構 SD04（西から）

② 讃岐国府廃絶後1（室町時代）

溝状遺構 SD02 は幅約 1.2m、深さ約 0.4mを測り、埋めた土は大きく3層に分けられます。下層は砂が堆積し、流水状態にあったようです。上層は埋め戻しによるものと考えられ、破損した土器片や石などをやや多く含みます。これらの土器は概ね鎌倉時代後半から室町時代前半頃のものが多く、概ね上層にまとまるため、室町時代に埋め戻されたと考えられます。



溝状遺構 SD02 断面（西から）

③ 讃岐国府廃絶後2（江戸時代）

江戸時代の土坑 SK01・SK03、溝状遺構 SD01 が見つかりました。

土坑 SK01 は掘削後しばらく開口しており、そこへ土砂が流れ込んで埋まったと考えられますが、SK03 はやや深い箱形の断面で、ほぼ単層に近い形で埋められており、開削後すぐに埋められたようです。

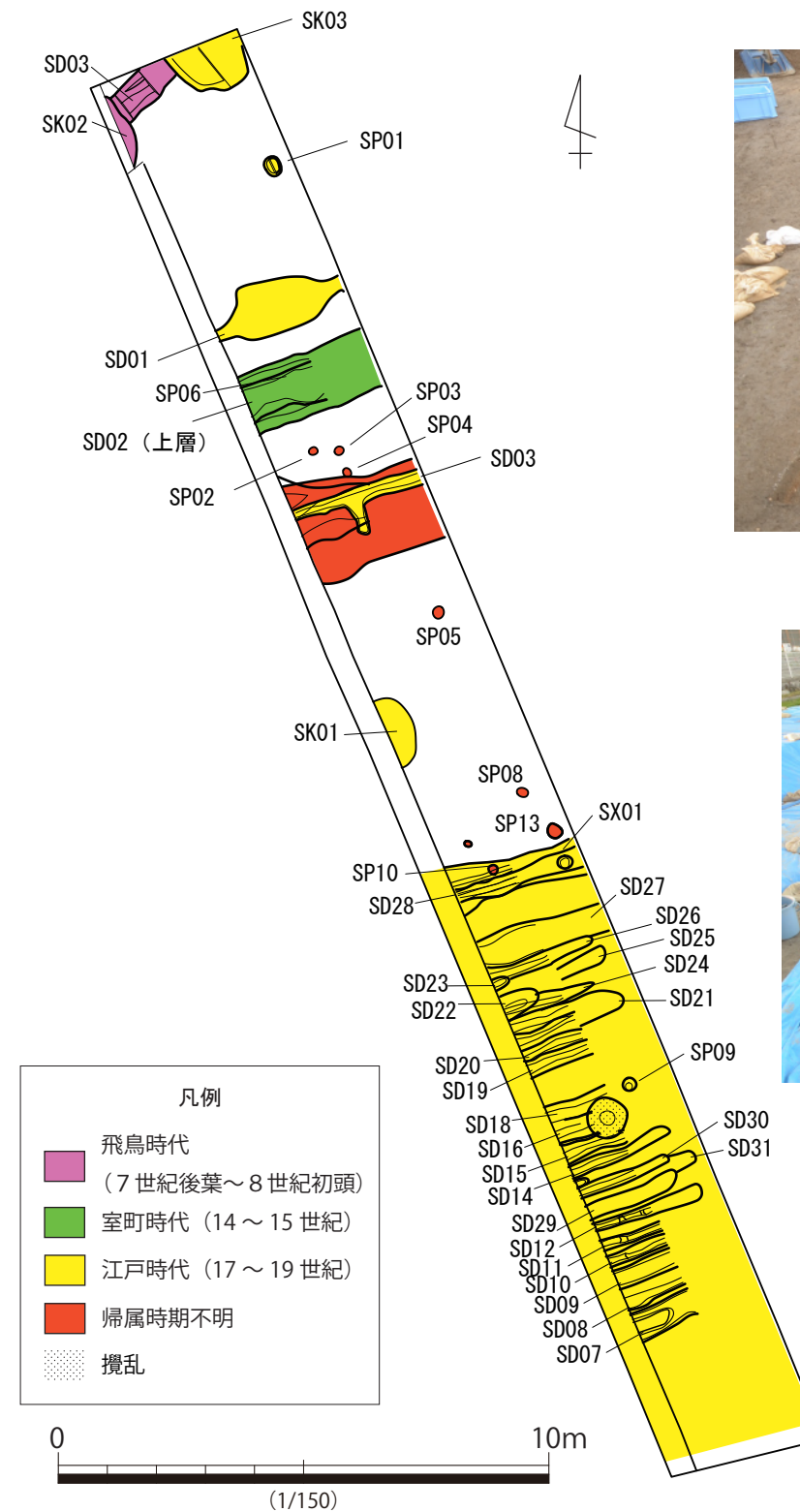
溝状遺構 SD01 は両端が細く、中央が隅丸方形を呈します。底部に粘土が堆積し、それを掘りなおして水が通るようにしていたようです。部分的に砂が西側から流れ込んだように見えるところが確認できます。大型の礫などが埋土中に含まれ、埋め戻し時に投棄されたものと考えられます。

南半部は SX01 を境に、南側で約 0.2mの高さの段落ちが確認できます。段落ちの下段には幅 0.1～0.3m程の浅い小溝が多数見つかりました。これらの溝はいろいろな深さから掘り込まれており、埋まり方も多様です。浅い溝の底部は凹凸が観察できるほか、断面形状が三角形を呈する場所もあります。水が流された痕跡もなく、土が攪拌されているように見えることから、畑地の耕作に伴い、農具での掘削が繰り返された痕跡だと考えています。遺物はごくわずかで、江戸時代前半頃のものを中心にします。



土坑 SK03 東西断面（南から）

溝状遺構 SD04 の東端を壊して掘り込まれている。



41次調査 遺構配置図



北半部遺構検出状況（北から）



南半部小溝群検出状況（南から）



牛を使った牛鋤による田起こしの様子（1951年）

（出典 瀬戸内海歴史民俗資料館蔵「合田栄作資料」）

3. まとめ

40次の大溝につながるような国府の区画施設は今回の調査では見つかりませんでした。国府が役所の機能を失って以後の様子を明らかにすることができました。

まず、室町時代にSD02が掘られ、周辺に配水した灌漑水路として使われたようですが、この時代のうちに役割を終え、埋め戻されます。